

豪雪

日本海側の豪雪はいまから二万三千年ほど前から始まり、八千年前ころから現在のような姿となつたという。二万年ほど前まで続いたウイークスコン氷河期の時代は、海水が雪となつて氷河に積み重なり、海面は現在より一〇〇メートル以上も低かった。朝鮮半島と日本列島を隔てている浅い海峡に阻まれた暖流が、日本海に流れ込めず当時の厳しい寒さのなか内海となつて孤立してゐた。氷河期が終わり気候の温暖化が進むとともに海面が上がりはじめ、間歇的にそして本格的に暖流が侵入し始めたのがおよそ一万三千年前である。

たらしている。対馬暖流の流入のほか豪雪にはさらにいくつかの条件が重なる。なぜシベリヤ大陸にあのように大規模かつ長い期間、厚さ三キロドリームにもおよぶ寒気が滞留するのかがその一つである。チベット高原とヒマラヤ山脈がなければ、シベリヤ高気圧は止まつていれば、すぐに移動性高気圧となってしまい大雪は長続きしない。

台の委託観測所だった富山県真川の七セブン五ゴ〇ゼンメートルという大記録があるが、いずれも昭和二〇年の豪雪の時の記録である。昨年、尾瀬の冬をとつたドキュメンタリーが放映されたが、例年になり豪雪で二メートルの雪のボルが見る間に埋まり、さらに継ぎ足して二本目でやつと五メートルを越える雪の深さを測っていた。この豪雪で雪解けが遅れ水芭蕉の見頃がひと月遅れの六月中ごろとなつたとの記憶も新しい。

日本海側の地方に降る豊かな雪と穏やかな海洋性の気候への気候変動は、ブナの森林を急速に育て、日本文化の原点である縄文式文化が開花し始めた。世界最古の土器でもある日本最古の縄文式土器がこの年代の地層から出土している。花粉が語る古代の気候変動を探る研究の第一人者安田嘉憲氏の多くの著書のなかで「森と文明の物語(ちくま文庫)」が楽しく読ませてくれる。

の長さ500kmを越える長大な雲の帯を見ることができる。ひときわ活発に輝いている積乱雲の列があり、雲の渦が並び、流れと直角の方向に並ぶトランズバースの雲の列といったものが興味深く確認できる。豪雪をもたらす特別な長大な雪雲が白頭山系の風下側にできて、北陸をめざして雪を集めている姿が見える。大陸の地形がまことに影響し、まさに宿命な場所に北陸地方が位置しており、この緯度にしては世界の類を見ないほど豪雪地帯となっているのである。

る深さとなつた。七メートルを超す積雪の深さになるにどのくらい雪が降るか想像し難い量である。この冬は太平洋側の地方でも記録的な大雪が降つて日本列島は雪一色に塗りかえられていた。まさに昭和二〇年は焦熱地獄であり雪地獄でもあつた。八年後、世界中を異常気象に巻き込んだ一九六三年の冬、サンバチ豪雪が北陸を直撃した。雪害という言葉が頻繁に登場しだしたのもこの頃からである。一〇〇年、二八八年、五〇六年豪雪と十八年でくりかえされた北陸豪雪が、この繰り返しでければ今世紀中にも再びというのは

日本海側の豪雪は、シベリア大陸上で放射冷却によってできた寒気団が、地球規模の流れである偏西風の蛇行で寒気の大氾濫を起こし上空の寒冷渦とともに襲来、暖かな日本海で豊富な熱と水蒸気をもつて雪雲がまとまり大雪をも

をみないほど豪雪地帯となつてゐる。その中で記録に残る豪雪は、敗戦間近かの昭和二十年の豪雪と三八年、サンパチ豪雪である。全国の気象官署のなかでの最深積雪の記録が雪の高田の二尺七寸九分であり、当時の中央気象

雪と十八年でくりかえされた北陸豪雪が、この
繰り返しだけで今世紀中にも再びというのは
杞憂だろうか

越後の雪深い郷で書いた鈴木牧之の「北越雪譜」(野島出版)には、およそ初雪は九月の末十月の首(はじめ)にあり。…昼夜に積もるところ六七尺より一丈に至る時もあり。往年(むかし)より今年に至るまで此雪此国(越後に降らざることなし)。されば初雪を観て吟詠遊興のたのしみは夢にもしらず、今年も又此の雪(の中)に在る事かと雪を悲(しむ)は辺郷の寒国に生まれたる不幸(べし)と云ふ。雪を観て楽しむ人の繁花の暖地に生まれたる天幸(めぐらんや)と書かれている。ヒマラヤを削り、白頭山を削り、暖流を堰き止めれば豪雪は終わるが無理な話である。コラシア大陸と日本列島という宿命を背負つての豪雪地帯なのである。